

かぐらおが

(題字は前学長 山田守英氏)

第 50 号

昭和61年12月1日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課



(写真撮影 精神科神経科 毛利 義臣)

大雪ダム付近

上海での五日間……………森 茂美… 2	研究室紹介…………… 5
海外だより Mayo Clinicに留学して……………高橋 達郎… 3	昭和61年度通学方法・居住状況調査結果一覧… 6
新任教官紹介 飯塚教授の就任によせて……………八竹 直… 4	体育大会…………… 7
教授就任にあたって……………飯塚 …… 4	解剖体慰霊式…………… 7
紹介……………丸子 基夫… 5	新人生研修 (第2回目) …… 7
就任挨拶……………M. N. Weedon=Newstead… 5	課外活動短信…………… 8
	窓外……………土井 陸雄… 8



上海での五日間

森 茂 美

旭川ではプラタナスの葉が落ちはじめた10月20日、成田から僅か3時間足らずの上海に向かいました。成田、上海間は直線距離で約1900km、緯度では九州の最南端に位置しています。気候的にみるとプラタナスの葉が丁度色づき始めていました。今回の旅行は中国科学院上海生理学研究所の招へいによるもので、主たる目的は講演・視察と研究討論にありました。中国科学院には中国全土に散在している122の研究所が所属し、戦前から設立されている生理学研究所のキャンパスには新しく設立された脳研究所や医学材料研究所などを含めて10以上の研究所があります。また中国科学院の総裁は科学行政の最高責任者でもあり、北京と上海の研究所が競い合いながら基礎的科学の振興に全力を上げています。上海滞在中に宿泊したのは中国科学院に所属するゲストハウスでしたが、小型のホテルを思わせる造りで食事時にはアメリカ、フランス、ドイツの研究者が数多くみられ、中国の隣人とも云うべき日本人の数は極めて少ないのが印象的でした。

このゲストハウスのすぐ近くには、建築中のビルディング・小学校・食品マーケットがあり、上海市民の生活を垣間みることもできました。夜が明けるのは午前6時位だったと思いますが、市民生活は夜明けとともに始まります。どこからともなく自転車に乗った人々があっと云う間に集り、四つ角の交差点は人と自転車で埋めつくされます。食品マーケットではコンクリート台の上に生鮮食品が山のように積み上げられ、甲高い声が売手と買手の間を飛びかいます。出勤前に食料品を買い求めるのが市民生活の基本のようです。小学校も朝早くから開校されていて、小ざっぱりとした服装の児童が次から次へと集まってきます。子供は一人という人口の抑制方針が行き届いているせいか、どの子も両親からまた社会から大事にされているようです。しかし中国でも過保護に伴う弊害が次第に深刻な問題になりつつあると聞かされました。さて建築中のビルディングですが、夜明けとともに作業が始まり日没とともに作業は終わります。良く気を付けていないとどこまで作業が進んでいるのかわかりません。日本的な作業の進め方とは全く無縁なようでした。午後5時になると日常の勤務が終わりますが、若いカップルの主人は子供を自転車の荷台にのせ、家路に急ぐ姿がいたるところで見うけられました。

さて科学教育ですがここ数年になってようやくこの課題に対する本格的着手がなされたようです。中国科学院

上海分室では毎年約30名の修士課程学生を受け入れています。この課程は3年間ですが最初の1年間では徹底的な教育がなされます。そして2日目からは上海分室に所属する研究所で研究が始まります。この30名という定員ですが中国全土の大学出身者の中から選び抜かれるわけですから、難関中の難関でただ単に学業成績が良いばかりでなく、研究を遂行するための強靱な精神力も要求されるようです。修士課程が終わりまずと博士課程に進みますが、この課程を指導できる教授も限定されているようで、教授はadviserとしての役割を果たします。上海滞在中にいくつかの研究室を訪ねましたが、研究を遂行しているのは主として若手の研究者ばかりでした。個人的な立場で研究討論をしていると、私が大学院生として生活をしてきた25年前に時計が戻ってしまったような錯覚をうけました。研究分野では文化大革命で5年間、その後の荒廃から立ち上がるのに5年間が費され、計10年間の歳月が今日の日を迎えるのに必要であったとよく云われます。私の大学院時代には日本の学問水準とアメリカ、ヨーロッパとの学問水準に大きな隔りがあり、何とかその隔りを埋めたいという願望が科学に対する探求心とは別にありました。

その当時の日本では戦後の混乱の中からアメリカ、ヨーロッパに留学の機会を与えられた教育・研究者が新しい日本の指導者として、国際社会における日本の在り方などを含めて私共に情熱ある指導をして下さいました。そしてその一方で私共は、いつ完成する保証もないサイエンスに夢をかけ、ひたむきな努力を続けました。上海での5日間の生活は忘れかけていた25年前を十分に想いおこさせてくれました。私と真剣な討論をした中国の若手研究者は、近い日に堂々と国際社会に登場してくるのでしょうか。科学の分野ばかりでなくほぼ全ての分野で“進歩・発展”と“停滞・衰態”は、際限のない巨大なうねりのように交互に押し寄せてきます。これは個人としての私にも当てはまります。旭川医大においても、ここかしこで卒業生を主体としたサイエンスの新しい息吹きが始まっています。軽少、軽薄な社会に日本は突入していると巷では云われますが、私共と責任を分かち合ってくれるような“夢と強靱な精神力を持った”学生諸君そして若手の研究者が1人でも多く本学に登場してくれるよう、心から願っています。

(生理学第2講座 教授)

海外日より Mayo Clinic に留学して

高橋 達 郎

私はこの度およそ6ヶ月間、米国で学ぶ機会に恵まれ、現在ミネソタ州ロチェスター市 Mayo Clinic において岡崎春雄教授の下、神経病理を勉強しているのでその近況を報告する。岡崎教授は本学創設間もない頃、臨床講堂で当時ではまだ珍しいCT写真を豊富に用い、脳血管病変を中心に御講演されましたので御記憶の方も多数おられることでしょう。

こちらに着いた翌日から早速、剖検脳への取り組みが始まった。伺うところでは、本施設では年間700~800体に及ぶ病理解剖の殆どすべての例で脳・脊髄を摘出するというので、病理診断が為されるまでに何らかの形で携わる関係者はその日常的処理に相当の労力を払っているが、その御陰で私は極めて濃密にそれらを手で触れ、眼で見ることが出来るという恩恵に浴している。同時に、これまでに集積された膨大な標本・資料にも折にふれ接している。これらはレジデントに対する教材でもあるとのことだが、私にとっては同室の2人の若いレジデント（マサチューセッツ出身の神経内科医とミシガン出身の神経外科医）に対して、彼らより多少とも経験の深いところを見せつける材料となる傍ら、彼らから英語を教わるチャンスを生み出してくれる格好の媒体ともなっている。

滞在してちょうど1ヶ月と日も浅く、未だに身の回りの全ての事象に対する好奇心・探検心と新たな発見・理解による解決の繰り返し、というのが日常生活の実状である。したがって筆者は、Mayo Complex と称される多数の施設及びその機構を把握するには至っていないが、案内書などから得られた知識を基に Mayo Clinic の概略をその背景にある自然・風土とともに紹介し、一研究室の机に向かいつつ感じたことをひとつ記したい。

ミネソタ州は、ほぼ本州に相当する面積と400万人余りの人口を有し、北東に五大湖のひとつスベリオル湖を臨み、北はカナダと国境を接している。ミシシッピ川の上流河川は、多数の湖とともになだらかに続く森や畑を潤し、静かで美しい自然環境を形成している。

Mayo Clinic の歴史は、英国から渡り地方医師をしていた Dr. William W. Mayo が1863年、ロチェスターでクリニックを開いたことに始まる。その後、このクリニックに彼の息子達 William J. Mayo と Charles H. Mayo も加わり、彼らは地域における実践的医療を実施するとの理念の下にたゆまぬ努力を重ねて新技術の導入、修練に励み臨床成果を挙げてきた。Mayo の名声は、全米のみならず世界中の医師・研究者に知れわたり、彼らを、また患者をロチェスターに呼び寄せる結果になったのである。この Mayo Clinic とロチェスターの発展の歴史は、本学図書館の「メイヨの医師達（The Doctors Mayo の邦訳版）に詳しい。

さて、今日においても Mayo Clinic が上述の実践的医療の実施、という理念を掲げていることに些かの変わりもない、それに向けての努力も怠っていない、とみてとれる。筆者はロチェスターに着いた翌朝、Mayo 財団

の office に赴き事務手続きを済ませた際、Mayo 関係の小冊子を数冊手渡されたが、どの頁を開いても 'patient care' やそれに類する表現が満ち満ちていることに驚きの念を抱いた。ある程度の予想はしていたがこれ程徹底しているとは思っていなかったのである。Mayo Clinic では診療・研究・教育それぞれが当然重要な位置付けを与えられているが、それは patient care のための診療であり、教育であり、また教育者の養成である、ということを繰り返し唱っている。小冊子の中から幾つかの表現を挙げてみよう。

1. Mayo's system of practicing medicine attracts specialists in every medical and surgical field. These specialists are able to use their skills efficiently and work cooperatively in a team approach to patient care.
2. Mayo's system is designed to offer each patient the highest standard of medical care. This goal is supported by two activities intertwined with patient care-----education and research.
3. At Mayo, doctors are both teachers and students. They accept a daily invitation to think, to learn more about how to help their patients. The interaction that education and research create promotes a constant exchange of ideas. And our patients are the prime beneficiaries of this exchange of knowledge.
4. Our research inspires new ideas and new methods that help improve patient care. Doctors here are aware of the most recent medical developments and of the possible applications of Mayo research to patient care. (Mayo Foundation 発行 'MAYO CLINIC' 1985 から抜粋)

こうした理念の一方、財源の上で最近 Mayo 財団のみでは研究・教育活動の維持・推進に困難を生じ、財団では各方面への寄金等と呼びかけている。Mayo 財団が1986年3月、従来 Mayo Clinic と極めて密接な関係にありながら独立した形をとっていた市内の二大病院 Rochester Methodist Hospital 及び Saint Marys Hospital との合併を発表したのも以上の背景に基くものと思われる。しかし、それらの説明文の中でも先述の '理念' が貫かれているのが読みとれた。いずれにせよ職員総数14,000人（医師1,700人）のそれぞれが、年間30万人にも及ぶ受診者に対し Mayo 親子の理念を今に継承しつつ、このミネソタの風土の中で実践しようと努力している姿は、一訪問者に感動を与えるものである。

末筆ながら在外研究の機会を与えて頂き感謝致すと同時にお世話になりました関係各位に厚く御礼申し上げます。（1986年10月25日記）

（病理学第一講座 講師）

新任教官紹介

昭和61年8月1日付けで皮膚科学講座に飯塚教授が、10月1日付けで英語の外国人教師としてM・N・ウィードン＝ニューステッド先生が就任されました。

本誌では、両先生の身近な方から御紹介と、御本人から挨拶を頂きました。

(学生課)

飯塚教授の就任によせて

泌尿器科学講座 教授

八 竹 直

飯塚 一先生が、このたび北海道大学へ転出された大河原章教授の後任として、皮膚科学講座の教授に昇任されましたことを、心よりお喜び申し上げます。

飯塚先生とは、私が当大学へ赴任した昭和58年からの短いお付き合いですので、多くの事を存じ上げているわけではありません。互いに、札幌と大阪と遠く離れて、生まれ育ったわけですが、縁は異なもので、飯塚先生が留学されたマイアミ大学の前任の研究者が私の大阪大学の同級生で、親しくしている現在の大阪大学の吉川邦彦皮膚科学教授であった事を当地に来て始めて知り、驚いた事でした。その後、吉川教授から飯塚先生がいかに素晴らしいお人柄で、立派な研究をしておられるかという話を何度も聞かされたものです。

飯塚先生とは教室が隣同士ですので、熱心に研究しておられる様子を毎日のように拝見し、いつも感心しています。先生は皮膚の生化学を主として研究しておられますが、亡き御尊父も生化学者であられた血を受継いでおられるのかもしれませんが。

飯塚先生は若くして教授に就任されましたが、物の考え方は非常にしっかりしたものを持っておられますし、大学生時代はスキージャンプの選手だったそうで、強い耐久力も持っておられます。今までもすでに、優れた研究業績をあげておられますが、先生のお人柄の素晴らしさに加え、若さと耐久力で立派な教室をつくれ、教育、研究、診療に活躍されることは明らかです。今後ますます大きく発展されます事を祈念いたしますとともに、隣の教室でかつ同じ7階西病棟を診療の場とするものとして、「これからもどうぞよろしく」と御願います次第です。



教授就任にあたって

皮膚科学講座

飯塚 一



今回、皮膚科学講座を担当することになりました。北大から旭川医大に講師として赴任してきましたのが昭和57年4月ですので、こちらに参りましてちょうど4年半になります。昨年、初代大河原教授が北大に移られたあとの後任として選ばれたわけですが、教育、診療、研究と、教室を主宰するにあたり責任の重さを毎日痛感しております。(痛感しているだけで、ちっとも進歩がないではないかとお叱りをうけそうですが……)。

私は、生まれも育ちも札幌で、外に出たことが留学生活を除けばないため、旭川が本当に第2の故郷になります。街の規模は、私の子供の頃の札幌とちょうど同じですし、寒さは学生時代スキー部をやっていたのであまり気になりません。また好学の気風といいますが、学生が真面目なのは最初の講義の時からいたく感銘を受け、自分たちの学生の頃と比べ、あまりの違いに驚きながら現在に至っております。

皮膚科は、発疹を対象とし、目に見えるだけに過去に細かく分類がなされました。結果的に難解な病名が多く敬遠なさる方も多いようですが、皮膚の反応パターンとして見ますと、限られた対応しかないものと推定されます。私達の教室ではその中でも特に表皮の増殖機構に焦点をしばりそのメカニズムを検討しておりますが、調べれば調べるほど奇妙な現象が見出されてきており、なかなか一般化が難しいようです。表皮の場合、増殖と分化(角化)が相互に関連しており、同時に分化(角化)が細胞死と直接結びついているため、どこかにゆきぶりをかけると、全てが連動してしまうことが問題を複雑にしている印象です。

細かい病名の暗記よりも、より包括的な、わかりやすい皮膚科学を目ざして、教育、研究、診療にたずさわっていかうと考えてはおりますが、なかなか道は遠く、教室員の方々とフーフー云いながら、それでも少しずつは進歩しているはずと、自分たちに云いきかせながらやっています。今後とも何とぞよろしく御指導、御鞭撻のほどをお願い申し上げます、御挨拶にかえさせていただきます。



紹介

ドイツ語 教授 丸子 基夫

新任外国人教師マーク・ネイサン・ウイードン=ニューステッド氏（我々はMr. ニューステッドと呼ばせてもらっている）は29才、中肉中背で視しめやすい容顔のシドニー出身。前任者サンリー氏の室に昨年から来ていたようで、旭川も少し知っているらしい。ニュー・サウス・ウェルズ大学では欧州近世史を専攻したほか、ロンドンのロイヤルンサイエティ・オブ・アーツで四年近く英語教育法を専修し、その間、北アフリカのスーダンと近東のクウェートと東京とで教員・通訳をやって実地経験をつみ、1985年にロンドンで英語教育免許を取り、この9月迄は神田の岩波ビルにある国際外語センターの先生であった。「日本語は未だ駄目です。だから余計べんきょうします」ずっと南国で生活した青年らしく水泳・ヨットが得意というが、「北国に来たのでスキーと読書に専念したい」とも。3-9才はホノルルで育った人だから海外経験も豊かで、辺地大学の学生諸君には願ってもない英語の先生である。

英語

Marc Nathan Weedon=Newstead

So far Asahikawa has lived up to my expectations in a number of ways. I anticipated that it would be pretty cold and I have since been told that this year the first snow arrived very early indeed;

the earliest snowfall for about 20 years, in fact. In spite of the premature icyness in the weather, I believe that in actual fact Asahikawa is a very warm place. The warm welcome, thoughtfulness and kindness that I have received from all of the people that I have met so far has been more than enough to thaw the early onset of winter. Thank you.

In my capacity as an English teacher here at Asahikawa Medical College I have been heartened to find that both the standard of English and the motivation of the students is quite high. It is my belief that successful language learning comes about through a combination of hard work, enjoyment and motivation. I hope that I will be able to act as a stimulus for all of these factors. More specifically, I feel that among Japanese learners the need for improvement of the listening and speaking skills is the number one priority.

The personal goals which I hope to achieve while I am here in Asahikawa include the furthering of my understanding of Japanese society. I hope that I will also be able to improve my Japanese language ability (which I assure you very much needs improvement). Furthermore I hope

to take part in some of Hokkaido's day to day pleasures, for example skiing.

In conclusion I would like to say that I am looking forward to a very pleasant stay in Asahikawa. (外国人教師)

研究室紹介

■ 公衆衛生学講座 ■ 福山 裕三

本講座は、旭川医科大学開講3年目の昭和50年4月1日に開講した。最初は福山教授、土井助教授と梅宮事務官の3名で出発したが、昭和54年望月助手、昭和55年に小林助手（本学昭55年卒）を、昭和56年には鹿島事務官を迎え、ようやく現体制が整った。公衆衛生学講座の使命は、一に教育、二に研究、三に社会活動である。講義では、図表による内容の読み取りに力を入れ、プリント方式の講義を行った。前期の講義期間に配られたプリント枚数は200枚に達し、その成果は学生諸君の支持を得、また金原出版の厚意により拙著「図説公衆衛生学」（昭和57年10月刊）の出版に結びついた。実習は、衛生行政者あるいは公衆衛生実践者を育成するような内容で進められ、実習で作成された作品は、本講座の社会活動としての市民の衛生教育の資料として役立っている。

研究の面では、昭和51年から53年の3年間にわたってトヨタ財団の助成を受け、「生体試料による環境汚染防止の研究」を行った。この助成とその後に受けた文部省科学研究費助成（環境科学特別研究、奨励研究）が土井、望月、小林らの種々の業績につながっている。最近では、土井は寄生虫学講座、放射線医学講座、帯広厚生病院と共同してエキノコックスの伝播経路を解明する研究を60年から開始し、これは本学の61年度教育研究特別経費のテーマとして採用された。61年からはイトムカ水銀鉱山労働者の水銀中毒後遺症を労働衛生学と社会学の両面から調査研究するプロジェクトを北大・札幌大・道教大など7大学の研究者と共同して実施することになり、この研究に対してトヨタ財団から研究助成が贈られることになった。

社会活動としては、北海道衛生部および旭川厚生病院との幅広い連携がある。地域の公衆衛生に貢献することは、地域の協力あるいは協同が必要である。幸いにも、昭和58年から、研究生が毎年数人ずつ入局し、現在9名の研究生が在籍し、北海道の衛生行政に携わると同時に、北海道の各種疾患の疫学の研究をしている。

本学出身の本講座の研究生を紹介すると、稚内保健所の妹尾所長（昭58年卒）、美幌保健所の山崎所長（昭58年卒）、紋別保健所の北村所長（昭58年卒）、帯広保健所的小林主任技師（昭59年卒）、釧路保健所の吉田主任技師（昭59年卒）、室蘭保健所の田中医師（昭60年卒）、千歳保健所の森医師（昭61年卒）、苫小牧保健所の竹内医師（昭61年卒）の8人である。研究生は各自任地の各種検診データや保健衛生資料を分析し地域の衛生行政と研究を結びつけた生きた公衆衛生学を目指している。その成果は日本公衆衛生学会および北海道公衆衛生学会で発表している。

(公衆衛生学講座 教授)

昭和61年度通学方法・ 居住状況調査結果一覧

昭和61年度通学方法・居住状況アンケートをまとめたので掲載します。

(学生課)

昭和61年6月1日現在

アンケート提出数

学 年	計						大 学 院					
	1	2	3	4	5	6	計	1	2	3	4	計
在籍学生数	130	131	132	126	109	127	755	17	10	12	15	54
アンケート提出数	120	122	118	114	94	96	664	13	5	5	7	30
提出率(%)	92.3	93.1	89.4	90.5	86.2	75.6	87.9	76.5	50.0	41.7	46.7	55.6

通学方法のまとめ

方 法	学 年						計	大 学 院				
	1	2	3	4	5	6		計	1	2	3	4
徒 歩	45	28	17	26	10	14	140 (21.1)	3		1	1	5 (16.7)
自 転 車	45	46	37	22	17	12	179 (27.0)			1		1 (3.3)
バ ス	20	4	3	1	7	5	40 (6.0)	1				1 (3.3)
バイク	任意加入	4	8	5	4	9	34 (5.1)					
	非加入	2	9	14	9	5	3	42 (6.3)				
自動車	任意加入	3	23	29	39	37	180 (27.1)	9	3	4	5	21 (70.0)
	非加入						1 (0.2)		1			1 (3.3)
自動車相乗	1	4	13	13	9	8	48 (7.2)	1				1 (3.3)
計	120	122	118	114	94	96	664	13	5	5	7	30

() 内は%

居住状況のまとめ

形 態	学 年						計	大 学 院				
	1	2	3	4	5	6		計	1	2	3	4
自 宅	29	13	22	16	14	21	115 (17.3)	5	1			6 (20.0)
親 戚 又 は 人 宅	1	2		1		1	5 (0.8)	1				1 (3.3)
下 宿	40	52	36	33	23	17	201 (30.3)					
借 アパート	49	55	58	63	55	55	335 (50.5)	6	3	5	7	21 (70.0)
借 家	1		2	1	2	1	7 (1.1)	1	1			2 (6.7)
道 営 住 宅							1 (0.2)					
計	120	122	118	114	94	96	664	13	5	5	7	30

() 内は%

居住状況内訳

居住状況	学 年						計	大 学 院				
	1	2	3	4	5	6		計	1	2	3	4
自 宅	29	13	22	16	14	21	115	5	1			6
親戚又は知人宅	1	2		1		1	5	1				1
下宿	~40,000					2	2					
	~45,000											
	~50,000											
	50,001~											
宿 (光熱水料込み)	~40,000	3	1	2	3	1	3	13				
	~45,000	6	16	14	15	13	5	69				
	~50,000	13	12	12	3	3	5	48				
	55,001~	10	3	5	1	1		20				
間借	~45,000	5	3		4	1	3	16				
	~50,000		12		1		1	14				
	~55,000	1	2	1				4				
	55,001~		1	1	1			3				
アパ	~45,000		1		2	1		4				
	~50,000	2			1			3				
	~55,000		1		1			2				
	50,001~				1	1	1	3				
バ	~20,000			2		2		6				
	~30,000	2	1	3	1	1	6	14	1			1
	~40,000	3		1				4				
	40,001~											
ト	~20,000	3	1	1	1	1		7				
	~30,000	12	7	14	13	13	14	73		1	2	3
	~40,000	12	18	14	16	9	4	73	2		1	2
	40,001~	12	2	2	2	2	2	22				2
家	~20,000	1			1	1	2	5				
	~30,000	1	1	3	1	4	1	11			1	1
	~40,000		21	10	20	15	16	82	3		1	1
	40,001~		1	1		3	2	7	1			1
道営・市営住宅	~20,000				1	1		2				
	~30,000	1			2	1		4				
	~40,000	1	1	6	2	2	5	17				2
	40,001~	1		3	1	2	1	8		1		1
借	~20,000											
	~30,000	1						1				
	~40,000											
	40,001~											
家	~20,000				1	1		3				
	~30,000											
	~40,000											
	40,001~											
道営・市営住宅	~20,000								1	1		1
	~30,000											
	~40,000			1		1		2	1			1
	40,001~											
道営・市営住宅								1	1			

体 育 大 会

学生主催の体育大会は、8月30日(土)～9月2日(火)の昼休み及び9月3日(水)に行われた。

学年対抗及び有志対抗合せて7種目に、参加した学生は善戦を繰り広げた。

結果は次のとおり。

○学年対抗

総合	優 勝 第4学年	準優勝 第3学年
サッカー	5 ヶ	4 ヶ
バスケット	4 ヶ	5 ヶ
駅 伝	4 ヶ	3 ヶ
2,000mリレー	3 ヶ	1 ヶ
つな引き	1 ヶ	3 ヶ

○有志対抗

	優 勝	準優勝
ソフトボール	ゾンビ	Movie's Stars
バレーボール	ホースニュース「豚」 ミラクル優	バドミントン部



新 入 生 研 修 (第 2 回 目)

4月に行われた第1回目に引き続き第2回目の新入生研修が10月27日(月)～31日(金)(29日は除く)までの4日間、福利厚生棟和室及び職員研修施設において行われた。

研修は、1年生全員を8つのグループに分け、教授2名(一般教育教官1名、基礎・臨床教官1名)の指導のもと学生15～16名を1グループとして午後5時10分から約2時間 ①前期試験終了後における修学上の問題、②学生生活上の問題、③人生問題、などを中心に懇談が行われた。

(学生課)

解 剖 体 慰 霊 式



昭和61年度解剖体慰霊式は9月24日(水)午後1時30分から本学体育館において執り行われました。

式に参会した御遺族・来賓・本学教職員・学生(第3学年)400名は、本学学生の教育及び学術研究のために尊い御遺体を提供され、医学発展の礎石となられた173名(病理解剖67名、法理解剖73名、系統解剖33名)の方の御遺徳を忍び御冥福を祈念しました。

解剖体御芳名奉読、黙とう、学長及び学生代表(3年小池且弥)の追悼の辞のあと、参会者による献花が行われ、石橋副学長の謝辞をもって、しめやかなうちに今年度の慰霊式が終了しました。

(学生課)



課外活動短信

○東日本医科学生総合体育大会（冬季大会）

ラグビー部門： 〰〜〰 青森県大鰐あじやらグラウンド

成績：ベスト8

（1回戦＝シード）

2回戦 対 杏林 51-0

3回戦 対 弘前 0-27

○北海道学生サッカーリーグ（一部）

成績 4位（4勝3負）

函教大 0-1

北大医 3-0

樽商大 2-0

釧教大 2-1

北大 1-3

札大 0-9

旭教大 1-0



インドの片隅から

昨年から数回、調査や学会でインド、パキスタンを訪れる機会があり、我々が日本で普段ごく当たり前と生活していることが、いかに思い違いであるかを痛感させられた。その一つは、昨年6月インドのボパール市での出来事である。ボパールの名は、1984年12月3日に米国系多国籍企業の農業工場で起きたガス爆発事故で一躍世界に知られるようになった。メチルイソシアネートという農業やウレタン樹脂の原料に使われる物質の貯蔵タンクが爆発して有毒ガスが洩れ、約三千人の死者を出し、十万人近い市民がガスに暴露された事件は、日本でも大きく報道されたので、記憶している人も多いと思う。私は、この事件の被害実態と後遺症を見るために、K大学のH氏と共に現地を訪れた。

ボパールはインド中央部に位置し、6月の日中の気温は摂氏40度、湿度30%以下になる。その炎天下を被害が最も激しかった工場前のスラム街を訪ね、地元医師やインターン生の協力で被害者の話を聞いて歩いていた2日目のことである。明日は primary school に案内すると言われたので、私たちはうかつにも日本の村の学校のようなものを想像してしまった。ところがその翌朝、案内のインターン生は同じスラム街の狭い路地にどんどん入って行ってしまふ。そして立ち止まったのは、周囲のスラムとまったく変わらない背の低いバラック住宅の前だった。戸口にかかったぼろ毛布の仕切りをめくると、5メートル四方もない土間にびっしりと座り込んだ、数十人の子供たちの黒い目が一斉に我々の方を振り向いた。

それは一種感動的な光景であった。ボランティアの若い女教師から字を教わっていた子供たちの年齢は5才前後だろうか。衣服は粗末で、はだしの子供も多く、栄養が良くないためか体格の小さな子供が目立った。しかし、教材といっても壁に掛けられた小さな黒板とヒンズー文字の表だけのその教室にみなぎっていた緊張感、熱く乾いたインドの空気を一瞬忘れさせたほど新鮮で、爽やかだった。日本の村の学校を想像していた私達は、あっけにとられると同時に、教育の原点を見たような気がして、わけもなく嬉しかった。そしてまた、自分達の想像力の貧しさが恥しくもあった。終戦前後の混乱期に小学生だった私たちは、今の日本の小学生とは比較にならぬほど貧しい学校生活を経験してきた筈だが、ボパールのスラム街の小学校は、私たちの想像を遥かに超えていた。あとで聞くと、その学校はガス爆発事故の後、住宅の主である小母さんが部屋を提供して実現したのだという。

私の脳裏に浮かぶこれとまったく対照的な光景は、最近東京へ行く飛行機から見た東京近辺の夜景である。羽田に近づいて高度を下げた機窓からは、街路灯などで煌々と照らされた路上の自動車の一台一台がくっきりと見分けられた。この光は人工衛星からも見えると言う。

現在、世界の人口は約48億人と推計されているが、その4分の3はいわゆる発展途上国の人口であり、GNPで比較すると、先進国との間に15-20倍もの所得格差がある。乳児死亡などの健康指標でも、先進国との間に10倍以上の差があるものがある。国連、WHOなどの国際機関や種々の国際協力によって格差を縮める努力はされているが、それには今後何十年の時間が必要だろう。このような世界の現状を知り、上の二つの光景を比較して、どっちが異常かと問われたら、私は後者の方が異常だと思ふのである。それは、先進国と途上国の人口比から見ても、地球上の限られた資源量からみても言えることだと思うのである。今年、日本国際保健医療学会が結成され、国際医療協力を論じる場が出来たが、このような場を支える若い医師たちが育ってゆくことを期待したい。格差の解消は、平和への最も重要な一歩であると思うから。

（公衆衛生学講座 助教授）